様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０３１３６

研究課題名（和文）日常的な支援に活かすアタッチメントの観点を滋養する手法の開発

研究課題名（英文）Development of a measure to foster sensitivity to attachment needs for daily clinical activities

研究代表者
工藤　晋平（KUDO, Shimpei）

名古屋大学・学生支援本部・准教授

研究者番号：７０４３５０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、支援者がアタッチメントの観点およびその観点から子どもの問題を見立て対応する能力（敏感性）を滋養しうるツールを作成することであった。事例検討を行い、支援者から見た気になる子どもの行動を拾い上げ、これを基にアタッチメントの観点からの理解が得られる「AICシステム」を作成した。社会的養護領域の支援者43名の協力を得て、半年間の使用前後でアタッチメントの概念、安心基地の表象（敏感性）に変化が見られるかを検討したところ、前者については肯定的な変化が見られた一方、後者については変化が見られなかった。支援者によるフィードバックからもAICによる情報の提示の仕方に改善を要することが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、支援の現場にいる支援者が、仕事の中でアタッチメントの観点と敏感性を滋養することを促すツールを作成することであった。これまでアタッチメントのアセスメントは特定の設定と専門的な訓練が必要で、経済的、時間的コストのかかるもので、現場の支援者には利用しにくいものであった。本研究はここに、アタッチメントの専門家ではない支援者（非専門家）が、日常の支援場面で目にする子どもの様子に基づきながらアタッチメントの観点を利用できる、という非専門家的アプローチを取るもので、この点に新規性がある。また、今後の改善を通してこれが機能するようになれば、支援の質を向上させることにつながり、ここに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to create a tool that would foster in workers an attachment perspective and the ability (sensitivity) to see and respond to children's problems from that perspective. Case discussions were conducted to pick up the behaviors of children of concern from the workers' point of view, and based on these, the "AIC System" was created, which provides an understanding of the behaviors from the attachment perspective. With the cooperation of 43 workers in the social care area, we examined whether there were changes in the attachment notion and the representation of a secure base (sensitivity) before and after six months of use, and found positive changes in the former, while there were no changes in the latter. Feedback from the workers also indicated that the way information is presented by the AIC requires improvement.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アタッチメント（愛着）　敏感性　行動問題　支援者支援　アタッチメント情報カード

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

乳幼児期に養育者との間で安心感あるアタッチメントを築けるかどうかは、その後のパーソナリティ発達や適応の決定因とは言えないまでも、重要な要因である（Bowlby, 1969/1982）。そのため、子どもの支援においては、アタッチメントのアセスメント方法やそれに基づいた支援プログラムなどが開発、活用されてきた。これらは子どもの行動問題に潜在するアタッチメントのニードを理解する上で有用な手法であるのだが、それにも拘わらず、これらを一般の臨床家・支援者（以下、「非専門家」という言葉はアタッチメント研究を専門としない人を表す）が、それぞれの職場において活用しようとした際には、（１）これらの手法を修得するための特別なトレーニングが必要である、（２）実施には特別な設定（時間、場所、手続きなど）を必要とする、（３）焦点がアタッチメントなどの特定化された現象に絞られている、といった問題がある。

アタッチメントに焦点を当てた査定、介入はしばしば日常の実務レベルで実行が困難なのである。逆に言えば、臨床家・支援者の間には、「構造化された設定」で「特定の手法を用いる」アセスメントやプログラムを修得するだけではなく、「構造化されていない」日常的な支援の中で「アタッチメントの観点を活かす」ことへのニーズが存在している。

一般にアタッチメントに基づく介入は養育者や支援者の「敏感性」を高めることに焦点を当てており（e.g., Bakermans-Kranenburg et al., 2003; Groark et al., 2005）、敏感性は、子どもの苦痛のシグナルを知覚し、その意味を理解し、素早く、適切に応答することとされている（Ainsworth et al., 1978）。このことが示唆するのは、「アタッチメントの観点を活かす」とは、アタッチメントの視点を内在化し、それによって子どもの問題の中にアタッチメントのニードを読み取り、これに応答することを意味している、ということである。したがって、「構造化されていない設定」で「非専門家である臨床家・支援者」が「アタッチメントの観点を活かす」ということは、（１）どうすれば日常的な支援において非専門家が子どもの問題をアタッチメントのニードを読み取る経験ができるか？　（２）非専門家である臨床家・支援者がどのようにしてこのアタッチメントの観点を習得（内在化）することができるようになるか？　といった問いに関わる。

## ２．研究の目的

本研究は、上記の問いに答えることを目的としている。言い換えるなら、特定の査定・介入の手法を専門的に学んでいない非専門家である臨床家・支援者が、行動問題を抱えた子どもへの日常的な支援の中で、アタッチメントの観点を活かし、これを自分のものとして修得するための手法を構築するための手法を開発することを目的としている。

## ３．研究の方法

**(1) 日常的な支援で得られる情報や観察された行動から、子どものアタッチメント状態について理解することにつながる項目を抽出するために事例検討を行う**

これまでの構造化された設定と専門的なトレーニングは、アセスメントや介入に必要な子どもや養育者の行動を引き出し、これを捉える専門家としての「目」を持っていることを前提としている。これに対し、本研究では日常の生活場面に生じる子どもの行動や状況のうち、非専門家の「目」が捉えたものから、同等の理解と対応を可能にすることを狙っている。そのため、非専門家である臨床家や支援者が目にしたものを拾い上げる必要があり、そのための方法として事例検討を行った。

行動問題を抱えた思春期の子どもたちの支援に取り組む児童養護施設において、計 10 回、各回 20 名程度の参加者（施設長、心理士、指導員等）があり、検討に付された子どもの年齢は 10-16 歳であった。なお、守秘義務の問題から、事例検討はすべて当該施設において行った。

**(2) それらの項目から支援のためのツールを作成する**

事例検討で報告される子どもの情報は、いずれも現場の臨床家・支援者の目に映ったものであるが、このうち、アタッチメントの視点から子どもの問題を理解する上で役立つと考えられる情報を拾い上げ、リスト化することで、専門家の「目」の代替とする。これは、敏感性における「シグナルの知覚」に相当する部分である。

この拾い上げられ、リスト化された情報について、各項目からどのようなアタッチメントのニードを読み取ることができるか、あるいはアタッチメントの知見に基づいてどのようなことが考えられるかを、仮説として記述する。また、これに基づいてどのような対応が可能であるか、ありうる選択肢を列記する。敏感性における「理解」「適切な応答」に相当する部分である。

拾い上げられた項目は、199 項目となった。行動問題の発達に沿って、「逆境的経験」「insecure なアタッチメント」「行動問題」の見出しのもとに項目を分類している。

これらのリスト化された項目について、各項目を１つのカード化すると、１つ１つの項目に注意を向けやすくなると考えたため、これをカード化した。作成されたツールは、カード、仮説、および情報を集約するためのエクセルファイルを含めて、「アタッチメント情報カード（Attachment Information Card:AIC）システム」と命名した。

図１　カードの例とエクセルファイル

| ■　逆境的経験 | （アタッチメントを不安定にする可能性のある逆境的経験によって、①特定の出来事への脆弱性、②特定の恐れやニード、③それに対する防衛的な方略や情動、④自己観や他者観が、内面化される可能性がある。そうした子どもの経験と発達の方向性についての解釈をリスト化している。） |
|---|---|
| －保護者について | |
| 疾患 | 養育者（特に主要な養育者）の精神疾患は子どもへの応答性を低下させたり、その質を悪化させるという形で子どものアタッチメント形成・発達に影響する。たとえば、うつは子どものアタッチメントを不安定にするリスク因子として最も注目されているものであるが、疾患の存在そのものよりも、それによって養育者の敏感性がどのように影響を被り、子どもへの応答性が低くなっていたかに目を向ける必要がある。子どもにとっては養育者が怖い存在に思えるかもしれない。あるいは、養育者を心配して不安を抱くかもしれない。養育者を気遣いながら、その予測不可能差に情緒的な混乱を覚えるかもしれない。調子が良い時の養育者と悪い時の養育者を統合できずに、養育者との間で自分が何を経験しているのか分からなくなるかもしれない。精神疾患による目立った問題がなかったとしても、子どもの発達上、困難があったかもしれないサインとして頭に入れておきたい要素だといえる。 |
| 保護者が精神的に不安定であったり、精神疾患があった（ある） | |

**(3) 臨床家・支援者が、作成された AIC システムを日常の支援を振り返り、事例を理解するために使用する**

現場の非専門家である臨床家・支援者に AIC システムを提供し、半年間、アタッチメントの観点から理解したい子どもがいた際に使用してもらった。AIC システムを使用した時には、どのような問題を抱えた子どもに対して使用したか（自由記述）、子どもの理解や対応にどの程度役立ったか（５件法）、何が役立ったか（自由記述）、足りなかったのはどういったところか（自由記述）を記録してもらった。記録用紙は半年後に回収した。

**(4) こうした振り返りを通してアタッチメントの観点が獲得されたかを検証する**

AIC システムの使用前後に、AQS およびアタッチメント・スクリプト法でアタッチメントの観点の測定を行った。

AQS（Waters & Dean, 1985）は養育者に対する子どもの行動を記述した 90 枚のカードから成っており、子どもの行動について最も当てはまらないものから最も当てはまるものまで、９段階に各 10 枚ずつカードを分類し、あらかじめアタッチメントの研究者が分類した結果との対応によって、その子どもがどの程度 secure なアタッチメントを示しているかを測定するものである。本研究ではむしろ、調査協力者の中に secure なアタッチメントの概念が形成されているかどうかを確認するために、先行研究（Waters & Deane, 1985; Schölmerich, & van Aken, 1996; Cassibba et al., 2000）を参考に「もしも『発達的に理想的な２歳児』であればカードの項目は当てはまるか、当てはまらないかを考え、カードを選択肢カードの前に分類してください」という教示を行い、カードを分類してもらった（これを AQSi とする）。これと規定の分類との対応（相関）によって、調査協力者の中に専門家と同程度の secure なアタッチメントの概念が内在化しているかどうかを捉えることができると考えられる。

アタッチメント・スクリプト法（以下、Attachment Script Assessment: ASA, Waters, & Waters, 2006）はカードに並んだ刺激語を見て物語を作ってもらうもので、カードは中性刺激２枚を含む６枚あり、内２枚が子どもと大人の相互作用、２枚が大人同士の相互作用に関する刺激語から成っている。カードを見てそれぞれの物語を作ってもらい、これを安心基地スクリプトの観点から７件法で評定する。なお、安心基地スクリプトは以下のように定義される。

表１　安心基地スクリプト

| |
|---|
| １．子ども（乳児）と母親（あるいは２人の大人の愛着パートナー）が建設的に何かをしている |
| ２．２人は出来事や他の人物によって妨害される。乳児（あるいは大人の１人）は苦痛を感じる |
| ３．助けを求める努力がある |
| ４．助けを求める努力が関知され助けが提供される |
| ５．助けの提供が受け入れられる |
| ６．助けは困難を乗り越えるのに効果的 |
| ７．助けはまた効果的な慰めや情動制御を含んでいる |
| ８．２人は建設的な相互作用に戻る（あるいは始める） |

各カードの評点は、子どものカードの平均評点、大人のカードの平均評点、および全体での平均評点としてまとめられる。ASA は安心基地の表象が内在化している程度を捉えており、他者が苦痛を経験している際にこれに対応する相互作用についての表象であることから、これを敏感性の内在化として捉えることもできるだろう。

上記２点を AIC システムを使用する前（pre-test）と後（post-test）に確認し、両者を比較することで、AIC システムを使用することでどのような変化が見られるかが明らかになる。

さらに、これらはカードを読み、物語を作ることから、言語能力との関連が考えられるため、WAIS-IV（Wechsler, 2008a, b）の言語理解指標（VIC）を用いてこれを測定した。

調査の実施に当たっては、名古屋大学学生支援本部における倫理審査を経ている。

調査機関は 2021 年 8 月から 2022 年 6 月であった。半年間の使用の後に post-test を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行のために調査期間が延期された。

## ４．研究成果

### （１）記述統計

社会的養護領域の支援者 43 名から協力が得られた。調査協力者についての人口統計学的変数は以下の通りである。

表２　調査協力者についての人口統計学的変数

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 年齢 | 平均 | SD | 最小値 | 最大値 | | |
| | 35 | 8.77 | 21 | 52 | | |
| 限職場での経験年数 | 平均 | SD | 最小値 | 最大値 | | |
| | 6.1 | 5.60 | 4 | 7 | | |
| 性別 | 男 | 女 | | | | |
| | 12 | 31 | | | | |
| 教育歴 | 専門 | 短大 | 大学 | 大学院 | | |
| | 1 | 4 | 25 | 13 | | |
| 職種 | ケアワーカー | ースワーカー | 心理士 | 指導員 | 保育士 | 未記入 |
| | 1 | 2 | 19 | 14 | 7 | 4 |

このうち、第２回目（post-test）の調査に協力が得られたのは、27 名であった。post-test に協力が得られた人と得られなかった人との間に、各変数の統計的な差異はなかった。

**（２）アタッチメントの変数について**

AQSi および SAS 子ども、大人、全体の pre-test と post-test の相関は、それぞれ.84(p<.01)、.25(ns)、.58(p<.05)、.57(p<.05)であった。SAS 子どもについては、pre-test と post-test の間に有意な相関がみられなかった。

AQSi、SAS および WAIS の VIC の平均値を表３に示す。

表３　アタッチメントの変数および WAIS VIC の平均値

| | N | M | SD |
|---|---|---|---|
| AQSi-pre | 38 | 0.46 | 0.521 |
| AQSi-post | 27 | 0.53 | 0.609 |
| SAS子ども-pre | 40 | 3.7 | 4.00 |
| SAS大人-pre | 40 | 3.6 | 3.50 |
| SAS全体-pre | 40 | 3.6 | 3.75 |
| SAS子ども-post | 18 | 4.1 | 4.50 |
| SAS大人-post | 18 | 3.7 | 3.50 |
| SAS全体-post | 18 | 3.9 | 3.88 |
| WAIS VIC | 40 | 115.4 | 117.00 |

本来の AQS は養育者と子の相互作用を観察し、これを評定する。.30 以上で当該の子どもは当該の養育者との関係に関して secure であると評価される。今回は、調査協力者に、「発達的に理想的な２歳児」を想像してもらってカードの分類をしてもらったが、本来の AQS にならって、.30 以上を secure な子ども像が内在化していると考えると、調査協力者全体ではこれが内在化していると考えられる。.30 を下回っている調査協力者は pre-test11 名（28.9%）、post-test5 名（18.5%）であった。

ASA は作成した物語を７段階で評定し､4 以上であるとその人のアタッチメント表象は secure であるとされる。１人が苦痛を示した際にもう１人がこれを助け、基の活動に戻っていくことの出来る表象を内在化しているということであり、これを敏感性の指標として代替することが出来る。調査協力者の平均は子ども、大人、全体を通してこれを上回っており、調査協力者全体では一定の敏感性を有しておらず､SAS 全体の評定値が４を下回っている調査協力者は pre-test28 名（70%）、post-test（50%）であった。

AQSi と SAS の相関を表４に示す。これを見ると、AQSi と SAS の間に有意な相関がみられていない。このことと上記の結果を合わせて考えると、支援者には secure な子ども像が内在化されている一方、他者の苦痛に対してどのような応答をすることが求められるかということについての心的表象が内在化されてはいないことが示唆される。子どもの状態は「理想」となる状態と同一かどうかの区別はつくけれども､「理想」とは異なる状態の子どもが何を必要としていて、その子どもにどう対応することが適切か、ということが分からない、ということであり、それが非専門家である支援者の困難を示しているのかもしれない。

WAIS の評価値は 100 を基準に、±15 が 1SD となる。今回の調査協力者の WAIS VIC の平均は 115.4 であり、1SD をわずかではあるものの上回っている。このことは、調査協力者の言語能力が平均よりも有意に高いこと、したがって結果の解釈に注意が必要であることを示している。WAIS の VIC が 100 を下回っている調査協力者は９名（21.4%）であった。

表４　AQSi と SAS の相関

| | SAS子ども-pre | | SAS大人-pre | | SAS全体-pre | | SAS子ども-post | SAS大人-post | SAS全体-post | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| AQSi-pre | .303 | † | .123 | | .238 | | .069 | -.179 | -.061 | |
| AQSi-post | .252 | | .097 | | .192 | | .058 | -.209 | -.084 | |

アタッチメントの変数と WAIS VIC との相関を表５に示す。これを見ると、SAS の大人の物語以外では WAIS VIC との相関が有意であり、AQSi、SAS ともに言語能力との関連があることが示唆される。他方、WAIS VIC は教育歴とも.68 と高い相関を示しており、これが交絡している可能性もある。

表５　AQSi および SAS と WAIS VIC との相関

| | AQSi-pre | | AQSi-post | | SAS子ども-pre | | SAS大人-pre | | SAS全体-pre | | SAS子ども-post | | SAS大人-post | | SAS全体-post | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| WAIS VIC | .345 | * | .469 | * | .309 | † | .191 | | .285 | † | .612 | ** | .267 | | .491 | * |

**（３）AIC の実施について**

調査協力者のうち、調査期間中に AIC を実施したと回答したのは、19 名（45%）であった。使用回数の平均は 1.4 で、２回以上使用した調査協力者は 13 名（実施したうちの 68.4%）であった。使用しなかった調査協力者からは、業務が忙しく使用することが出来なかった、などの理由が報告されている。

AIC を使用した調査協力者には、AIC システムがどの程度役に立ったかを５件法（とても役

に立った－まったく役に立たなかった)で尋ねており、延べデータ数65の平均は4.15(SD=0.72)であった。AIC システムを使用した人の多くがこのシステムを高く評価をしているが、他方、55%の調査協力者がこれを使用しなかったということは、コロナ禍であったことを考えても、使用へのハードルが低くないことを伺わせる。使用した人の自由記述からは、子どもの行動問題の理解に関して役に立つところが多かったが、提示された仮説が羅列的で、そこから支援者なりの理解に到達することが難しかったこと、理解とともに対応についての記述ももっと欲しかったこと、などが綴られており、これらの点について改善が必要であると考えられる。

**（4）アタッチメントに関する変数の変化について**

pre-test と post-test における AQSi および SAS に変化が生じているか、特に AIC システムの使用によってその差が生じているかを検証するために、post-test の各アタッチメント変数を目的変数、人口統計学的変数、WAIS VIC、pre-test における各アタッチメント変数、AIC 使用の有無、pre-test におおける各アタッチメント変数と AIC 使用の有無の交互作用項を説明変数とする、重回帰分析を行った（表 6-9)。

表６　AQSi-post の重回帰分析

| 変数名 | Step1 | | Step2 | | Step3 | | Step4 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年齢 | 0.010 | + | 0.011 | + | 0.003 | | 0.005 | |
| 性別 | 0.006 | | 0.018 | | -0.054 | | -0.053 | |
| 教育歴 | -0.041 | | -0.022 | | -0.053 | | -0.027 | |
| 勤務年数 | 0.008 | | 0.008 | | 0.002 | | 0.004 | |
| WAIS VIC | 0.008 | + | 0.007 | + | 0.006 | * | 0.007 | ** |
| AQSi-pre | | | | | 0.804 | ** | 0.749 | ** |
| AIC実施 | | | 0.090 | | -0.017 | | 0.049 | |
| AQSi-pre*AIC実施 | | | | | | | -0.675 | * |
| $R^2$ | .467 | * | .497 | * | .819 | ** | .867 | ** |

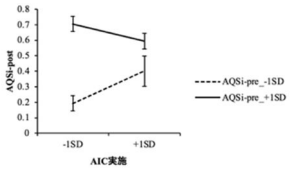



表７　SAS 子ども-post の重回帰分析

| 変数名 | Step1 | Step2 | Step3 | Step4 |
|---|---|---|---|---|
| 年齢 | -0.029 | -0.052 | -0.054 | -0.049 |
| 性別 | -0.180 | -0.594 | -0.765 | -0.915 |
| 教育歴 | -0.016 | -0.050 | -0.015 | -0.153 |
| 勤務年数 | -0.069 | -0.057 | -0.041 | -0.044 |
| WAIS VIC | 0.039 | 0.029 | 0.027 | 0.043 |
| SAS子ども-pre | | 0.435 | 0.510 | 0.280 |
| AIC実施 | | | -0.301 | -0.629 |
| SAS子ども-pre*AIC実施 | | | | 0.694 |
| $R^2$ | .469 | .557 | .575 | .625 |

表８　SAS 大人-post の重回帰分析

| 変数名 | Step1 | | Step2 | | Step3 | | Step4 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年齢 | 0.010 | | -0.020 | | -0.028 | | -0.023 | |
| 性別 | 0.406 | | -0.035 | | 0.130 | | 0.030 | |
| 教育歴 | 0.791 | | 0.552 | | 0.432 | | 0.325 | |
| 勤務年数 | 0.020 | | 0.020 | | -0.011 | | -0.008 | |
| WAIS VIC | -0.008 | | -0.023 | | -0.024 | | -0.003 | |
| SAS大人-pre | | | 0.407 | + | 0.458 | * | 0.257 | |
| AIC実施 | | | | | 0.663 | | 0.276 | |
| SAS大人-pre*AIC実施 | | | | | | | 0.723 | * |
| $R^2$ | .282 | | .494 | | .587 | | .782 | * |

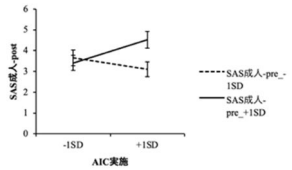
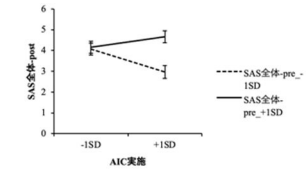



表９　SAS 全体-post の重回帰分析

| 変数名 | Step1 | | Step2 | | Step3 | | Step4 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年齢 | -0.009 | | -0.054 | + | -0.055 | + | -0.055 | * |
| 性別 | 0.113 | | -0.601 | | -0.536 | | -0.825 | * |
| 教育歴 | 0.388 | | 0.154 | | 0.129 | | -0.065 | |
| 勤務年数 | -0.024 | | -0.015 | | -0.024 | | -0.021 | |
| WAIS VIC | 0.016 | | -0.005 | | -0.005 | | 0.016 | |
| SAS全体-pre | | | 0.701 | * | 0.699 | * | 0.530 | * |
| AIC実施 | | | | | 0.189 | | -0.299 | |
| SAS全体-pre*AIC実施 | | | | | | | 0.939 | * |
| $R^2$ | .359 | | .651 | + | .661 | + | .851 | * |




これらの結果より、WAIS VIC の影響は有意ではないか、もしくはごく小さいものであった。他方、SAS 子どもを除く各アタッチメント変数において交互作用項が有意であり、(a) AQSi の評定値の低い調査協力者が AIC システムを使用することで、AQSi の高い調査協力者との差がなくなること、(b) SAS 大人の評定値の高い調査協力者が AIC システムを使用することで、さらにその値が上昇すること、(c) 逆に SAS 全体の評定値の低い調査協力者が AIC システムを使用することで、さらにその値が低下することが示された。AIC システムは、子どもの関係の取り方が secure なものであるかどうかについて、これを判別しにくい支援者の能力を高めること、他方、子どもの苦痛に対する敏感性については、この能力の高い支援者の能力をさらに高め、もしくはこの能力の低い支援者の能力をさらに低下させることが考えられる。

これは、AIC システムを使用した調査協力者のフィードバックとも一致しており、言葉を換えれば、AIC システムの項目は、知覚し、理解し、応答することという敏感性に関して、専門家の「目」を代替し、一部において（secure かどうかという点について)「理解」を提示するものの、苦痛を経験している際のニードの「理解」、およびこれに対する「応答」に関しては、専門家を代替するものとはなっていないと言える。

そのため、仮説の提示に関して、文言をより平易なものとすること、提示された仮説をどのようにまとめるかについての検討を行うこと(将来的には AI の導入も考えられるかもしれない)、AIC システムの使い方についての講習や研究、あるいは AIC システムを用いた事例検討などを開催すること、などによって、得られた仮説から支援者なりの子どもへの関わり方に至る道筋を容易にすることが、今後の検討において必要であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>工藤晋平 | ４．巻<br>23 |
| ２．論文標題<br>アタッチメントの視点から見た虐待や暴力の加害者の理解と支援 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>子どもの虐待とネグレクト | ６．最初と最後の頁<br>245-250 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>工藤晋平 | ４．巻<br>216 |
| ２．論文標題<br>特集「大人の愛着障害」　（エッセイ）人はなぜそれを愛着障害と呼ぶのだろう． | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>こころの科学 | ６．最初と最後の頁<br>92-93 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Kitagawa Megumi、Iwamoto Sayaka、Umemura Tomotaka、Kudo Shimpei、Kazui Miyuki、Matsuura Hiromi、Mesman Judi | ４．巻 |
| ２．論文標題<br>Attachment-based intervention improves Japanese parent-child relationship quality: A pilot study | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Current Psychology | ６．最初と最後の頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1007/s12144-020-01297-9 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Nakao Tatsuma、Murakami Tatsuya、Kazui Miyuki | ４．巻<br>27 |
| ２．論文標題<br>Measuring Attachment Anxiety and Attachment Avoidance in Middle-Childhood: Japanese Adaptation of ECR-RS for Children | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>The Japanese Journal of Personality | ６．最初と最後の頁<br>179～189 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.2132/personality.27.3.1 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中尾達馬 | ４．巻<br>2 |
| ２．論文標題<br>児童期におけるアタッチメントと学校適応 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>琉球大学教職センター紀要 | ６．最初と最後の頁<br>25-30 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>下郷大介・工藤晋平・藪内秀樹・中川嘉子・原敬 |
| ２．発表標題<br>準備委員会企画シンポジウム　「加害者と家族」をめぐる心理臨床 |
| ３．学会等名<br>家族心理学会第38回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>工藤晋平 |
| ２．発表標題<br>ミニ・シンポジウム「犯罪・非行臨床に活かすメンタライジング・アプローチ」　メンタライジングの焦点：アタッチメントの視点から |
| ３．学会等名<br>犯罪心理学会第58回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>工藤晋平 |
| ２．発表標題<br>アタッチメントと非行情報カード（ADIC）の開発（１） |
| ３．学会等名<br>犯罪心理学会第58回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kitagawa, M., Iwamoto, S., Umemura, T., Kudo, S., Kazui, M., & Matsuura, H. |
| ２．発表標題<br>The circle of security parenting program and individualized video review improve Japanese parent-child relationship quality. |
| ３．学会等名<br>the 26th Biennial meeting of the international society for the study of behavioural development, Rhodes, Greece |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>北川恵 |
| ２．発表標題<br>アタッチメント理論に基づく親子の関係性支援、シンポジウム「発達の予兆を読む－親子の関係性から占う赤ちゃんの未来－」 |
| ３．学会等名<br>日本赤ちゃん学会第20回学術集会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>北川恵 |
| ２．発表標題<br>日本における「安心感の輪」子育てプログラムの成果と課題、海外招聘プログラム「アタッチメント理論をベースにした親子への介入の実際」 |
| ３．学会等名<br>日本子ども虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>古川輝・三浦英樹・工藤晋平・那須昭洋・竹田収 |
| ２．発表標題<br>ミニ・シンポ「小児期の逆境体験（ACEs: Adverse Childhood Experiences ）」と非行・犯罪との関係を考える |
| ３．学会等名<br>日本犯罪心理学会第57回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>工藤晋平 |
| ２．発表標題<br>招待講演指定討論「実証研究に向けての討議あるいは精神分析性」 |
| ３．学会等名<br>日本精神分析学会第63回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>木下雅弘・野崎優樹・北川恵 |
| ２．発表標題<br>大学生におけるアイデンティティ発達と養護性との関連 |
| ３．学会等名<br>日本心理学会第83回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>古村健太郎・梅村比丘・大久保圭介・金政祐司・工藤晋平・戸田弘二 |
| ２．発表標題<br>アタッチメント・スタイル以外に注目した成人のアタッチメント研究：アタッチメント対象やケアギビング |
| ３．学会等名<br>日本心理学会第82回大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>宮口智恵・妹尾洋之・久保樹里・坂口伊都・工藤晋平 |
| ２．発表標題<br>家族再統合支援は本当に必要か　ふたたび（Part2） |
| ３．学会等名<br>日本子ども虐待防止学会第24回学術集会おかやま大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計3件

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>遠藤利彦（編）・工藤晋平・本島優子・中尾達馬・大久保圭介・石井悠・北川恵・平田悠里・篠原郁子・金政祐司・数井みゆき・堤かおり・森田展彰 | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>日本評論社 | 5．総ページ数<br>256 |
| 3．書名<br>入門 アタッチメント理論 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Sroufe LA, Egeland B, Carlson EA, Collins WA.（著）　数井みゆき・工藤晋平（監訳） | 4．発行年<br>2022年 |
| 2．出版社<br>誠信書房 | 5．総ページ数<br>430 |
| 3．書名<br>人間の発達とアタッチメント | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>工藤　晋平 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>ミネルヴァ書房 | 5．総ページ数<br>384 |
| 3．書名<br>支援のための臨床的アタッチメント論 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 数井　みゆき<br>(KAZUI MIYUKI)<br>(20282270) | 茨城大学・教育学部・教授<br>(12101) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 北川　恵<br>(KITAGAWA MEGUMI)<br>(90309360) | 甲南大学・文学部・教授<br>(34506) | |
| 研究分担者 | 中尾　達馬<br>(NAKAO TATSUMA)<br>(40380662) | 琉球大学・教育学部・准教授<br>(18001) | |
| 研究分担者 | 梅村　比丘<br>(UMEMURA TOMOTAKA)<br>(80805325) | 広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授<br>(15401) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|